

# 『Shall we ワックス？』

曾我部 敦史

5,589 文字

あらすじ

清掃会社に勤める徳永は、ある夜、ワックスの塗り直しに行くよう指示される。現地の病院に向かった彼は、廊下に残された大量の足跡を発見する。不審に思いながらも、順調に作業を進める徳永。すると、病室から老人が現われ、ワックスの上を勝手に歩き出してしまう。そのとき、徳永がとった行動とは？

「さっき、H記念病院からクレームがあったぞ。今夜、塗り直しに行ってくれよ」

業務部長の中村が、喫煙室に入ってくるなりそう言い放った。すでに煙草を吸い終わろうとしていた班長の望月は、あからさまに嫌な顔をした。その隣にいた30才の徳永和久は、とっさに今夜の業務に及ぼす影響を頭の中で描いていた。

「連絡って、いつあったんすか？」

望月は煙草を乱暴に押しつぶしながら聞いた。

「今日の朝イチかな」

すでに時刻は、夕方の5時である。望月を長とする4名の夜勤清掃部隊は、まもなく出発する予定だった。

「全然さっきじゃないじゃないですか。そういうのは、早く教えてくださいよ。こっちは段取りがあるんですから」

望月はウンザリとした声を出す。入社してまだ3年の徳永も、すでに中村の気まぐれに辟易としていたが、望月と中村の付き合いは10年をはるかに超えている。中村に対してとっくに諦観の念を抱いているはずの望月だが、たまには嫌味のひとつやふたつ、言いたくなるころだろう。

「わりい、わりい。でも、昼間に電話すると、お前、すごい機嫌悪いじゃん」

悪びれた様子もない中村は煙草をくわえると、黄ばんだパイプ椅子に座った。

基本的にこの会社の上下関係はあってないようなものだ。中村だって、役職は部長だが、今でも度々現場に駆り出され作業している。

「当たり前じゃないすか、こっちは寝てるんですから。で、クレームっていったい何だったんです？」

望月は当たり前のように次の煙草に火を点ける。同じく夜勤班の徳永は、思わず時計を見た。すでに出発予定時刻を過ぎている。時間にルーズなもの、この会社の悪い習慣だ。

「なんか、足跡がついてたって話だ」

「足跡？ そんなの、うちのせいじゃないっすよ。どうせ、患者がワックス乾く前に平気で歩いたんですよ」

「注意喚起の張り紙はしたのか？」

「もちろんすよ。な、徳永」

望月は鼻から煙を吐き出しながら徳永に顔を向けた。

徳永は何度も大きくうなずいた。望月がわざとらしい笑みを浮かべている。嫌な予感がした。

「俺らは先に現場行ってっから、徳永は、塗り直し行ってきてくれよな」

はい、予感的中！

「オレっすか？ この前も置き忘れのモップ取りにいったじゃないですか。たまには、他

の奴に行かせてくださいよ」

「他の奴じゃ、遅せえんだよ。それにお前、裏道詳しいだろ」

こういうときほど、車好きの自分が呪わしく思えるときはない。徳永は現場の移動に自分の愛車を使っている。実家住まいの徳永は給料の大半を愛車に注ぎ込んでいる。恋人は愛車というタイプなのだ。

たしかに運転は好きだし、道にも詳しいが、それとこれとは話がちがう。割が合わない。不公平だ。

「徳永くん。今日のところは頼むよ。今度、焼肉おごってやるからさ」

部長のこういう約束こそ、一番当てにならないことは知っていたが、上司に直接そう言われては断ることはできない。

「じゃあ、荷物入れて、もう行きますわ」

徳永は勢いよく立ち上がった。少し頭がクラクラした。

「よろしくっす！ 頼むぞ、若者よ」

調子の良い望月の声を背に、徳永は喫煙室を出た。

H記念病院は郊外にある。塗り直しの作業自体はすぐに終わるだろうが、移動には往復で最低一時間はかかる。

そうなると、本来の作業が遅れることになる。しかも、今日の現場は某テーマパークの地獄の水路清掃だ。今の時期は寒さがこたえる。辛い作業はやっぱり早く終わらせたい。

「あれ？ 今日、ワックス作業でしたっけ？」

倉庫から道具を出していると、後輩の安藤が声をかけてきた。

「塗り直し。これから、H病院いってくるから」

「マジっすか？」

同じく後輩の宮田が、しかめっ面をする。この表情が最近、望月と似てきた。

よく見ると、二人ともスマホを片手に持っている。望月が来るのを待っているのだろう。

「班長、あと二本は吸うと思うよ」

「そうすか。もう、慣れましたよ」

安藤が壁を背にその場に座り込んだ。

「徳永さん。早く戻ってきて下さいよ。オレたち凍傷になっちゃいますよー」

痩せ型で寒さに弱い宮田が、泣きそうな声を出した。

「わかった、わかった」

徳永は事務所を出た。言われなくても現場に急行するつもりだった。この会社は離職率が高い。後輩二人に仕事を辞められたら、自分にしわ寄せが来るのだ。

※

病院内での作業は、決められた時間内でこなさなければならない。徳永は病院の駐車場に到着すると、すぐに道具を台車に積んで、夜間入口の前で時間を待った。

夜の冷たい風が音を立てる。

「うわっ、さむっ」

裏口は風を遮るものがない。徳永は思わず背中を丸くした。

ようやく時間になり、防災センターで手続きをして中に入れてもらった。暖かくて、思わずホッとする。

まずはナースステーションに寄って、許可をもらう。

「こんばんは。よろしくお願いします」

「あれ、今日、作業日でしたっけ？」

中にいたナースが怪訝そうな顔をした。年のころは徳永と同じ位の、名札に木村とあるこのナースが、徳永は苦手だった。まくし立てるように喋るので、こっちが叱られているような気持ちになる。

事情を説明すると、

「ああそうですか。じゃ、お願いします」

と素っ気ない。忙しいナースにとってみれば、床の足跡など瑣末なことなのだろう。

「今日は、作業中に誰か部屋から出てきたりしませんよね？」

徳永はそれとなく聞いた。これは暗に足跡をつけたのは、入院患者だということを示している。

「ああ、大丈夫ですよ。お年寄りばかりだから、もう眠くなっているでしょう」

ナースは他人事のように答えた。

「そうですか。じゃ、作業入ります」

徳永が台車に手をかけると、

「明かりは、マックスにしませんから」

ナースは早口でそう言った。はいはい、わかってますよ。徳永は心の中でそう答えた。

この病院は夜間、共用部の電気を最大にしてくれないので、やりにくいことこの上ない。そのくせ、確認するときだけは最大にするから憎たらしい。

3階の廊下に到着すると、すでに照度が絞られていた。これでは足跡がどこにあるのかよくわからない。しかも、廊下のスイッチでは、照度の調整ができない。徳永は思わず舌打ちをした。

すると、忘れていましたといわんばかりに、廊下が少し明るくなった。木村がナースステーションから操作したのだろう。

首の角度を変えて見るまでもなく、床面にはたくさんの足跡がついていた。ひとつかふたつかと思っていたが、けっこうな数が広範囲についている。外履きのような凹凸はなく、平滑な跡なので、犯人は患者だろう。上履きの裏をチェックすれば犯人は簡単に特定できそうだ。

幸い、足跡はそれほど深くない。少し厚く塗り直せば目立たなくなるだろうが、いかん

せん範囲が広いので、全体的にワックスをもう一度塗布する必要がある。徳永は早速、作業に取り掛かった。

清掃パネルと清掃マットを設置し、フラットモップの表面に速乾性のワックスを浸す。そして、ワックスの入ったポリタンクを片手に、奥から手早く塗り直しの作業を始めた。

本当なら、ワックスの重ね塗りは、やりたくない。ワックスの層が厚くなるほど汚れが蓄積したとき目立つし、なにより来年の剥離作業が面倒だ。だが、今回のようなケースはこうする他ない。

ひと通り塗り直し、全体を見渡した。塗り直しはどうしてもムラが出る。だが、廊下の照度が低いので、綺麗になったかよくわからない。

「まあ、仕方ないか」

徳永は、キャスター付きの扇風機を回し始めた。速乾性なので、風を当てれば乾くの5分もかからない。時計を見た。これなら、すぐに現場に行けそうだ。寒さに震える後輩たちの姿が目についた。

そのときだった。カラカラと静かに引き戸の開く音がしたかと思うと、一番端の病室から、老人がひょっこり顔を出した。性別はよくわからない。

「すみません。ワックス塗りたてなんで、出てこないでください」

徳永は声をかけた。老人は何も言わない。嫌な予感がした。

と、老人はなんのためらいもなく、部屋から廊下におどり出た。

はい、予感的中！

老人はせっかく塗り直したワックスの上をスリッパでペタリペタリと踏んでいく。寝間着の前がだらしなくはだけている。どうやらお爺さんのようだった。

「ちょ、ちょっと、おじいちゃん。危ないですよ！」

声かけには応じず、お爺さんは無表情のまま歩き回っている。

徳永は思わず天を仰いだ。これで、お爺さんが転んで怪我でもしたら一大事だ。徳永は慌てて作業靴を脱ぎ、ワックスの上を進んでいった。足裏の感触で、まだ全然乾いていないことがわかる。

「おじいちゃん、あぶないから、すべるから部屋もどりましょう。ねっ」

徳永はお爺さんの肩に手を置いた。それが気に障ったのか、お爺さんはイヤイヤをするように身体を激しく左右に揺らした。と同時に、言葉にならない奇声を上げ始めた。

徳永はそれほど動揺しなかった。昨年亡くなった自分の祖母を思い出していたからだ。祖母は認知症を患っていた。認知症の人は、感情で行動する。もしかしたら、子供の頃のいたずらをしている記憶がよみがえっているのかもしれないし、単純に足裏のペタペタとした感触が心地いいのかもかもしれない。いずれにせよ、いったん興奮すると、すぐに鎮めるのは難しい。徳永にできることは、お爺さんが転倒しないように気を使うことだけだった。

老人が動く度に塗り直したワックスがどんどん汚れていく。徳永はただ無心でそれを眺めていた。

「あ、シゲアキさん。どうしたんですか！」

騒ぎを聞いた誰かが呼んでくれたのだろうか、エレベーターホールから木村ナースが現れた。慌ててこちらに駆けてくる。

「これ、もう乾いてますか？」

ナースは扇風機の前で立ち止まり、床を指差した。

「また塗り直すんで、入っちゃってください」

徳永の返事にナースは一度頭を下げると、慎重な足どりでこちらに近づいてきた。

「あーっ、もう、なにやってんだか！」

ナースは老人の背中に手を回し、ヒステリックな金切り声を出した。すると、お爺さんはからだをビクリとさせて、急におとなしくなってしまった。怯えているのは徳永の目にもよくわかった。お爺さんはそのまま、自分の病室に誘導されていったが、姿が見えなくなっても部屋の中から、ナースの叱責する声が聞こえた。

不意に、介護に疲れた徳永の母が、祖母を叱りつけていた姿がよみがえってきた。徳永はやるせない気持ちになった。

「すいません。また足跡だらけになっちゃいましたね」

病室から出てきたナースは、苦笑いを浮かべて腕時計を見た。作業時間を気にしているのだろう。

「あと、十分しかないですけど・・・間に合います？」

「なんとかします」

「本当に、すみません。あの人には、よく言っておきますから」

「あのおじいちゃん。認知症なんですか？」

「ええ、まあ・・・」

「あの、オレが言うのもアレですけど、全然、たいした作業じゃないんで、あんまり、怒らないであげてください」

「え・・・はい。わかりました」

ナースは頭を下げると引き返していった。

徳永は頭をかいた。また塗り直しである。間に合うのか？ 徳永は急いで作業をやり直した。もう、仕上がり云々の話ではない。作業を完了させることが大事だ。

作業中、何度も祖母のことを思い出していた。大好きだったおばあちゃん。あんなに綺麗好きだったのに、最後はいろんなところを汚して家族やヘルパーさんをさんざん困らせたおばあちゃん。

時間を数分オーバーしてしまっただが、なんとか作業を終えた。再びお爺さんが出てこないかヒヤヒヤしたが、大丈夫だった。乾燥を確認して、慌ててナースステーションに戻る。

「作業、終わりました。確認お願いします」

徳永が声をかけると、座っていた木村ナースが顔を上げ、壁掛け時計を見た。

「さっきは、本当にご迷惑をおかけしましたね」

ナースは立ち上がった。時間超過について何か言われるかと思ったが、大丈夫だった。照明の調節ダイヤルを操作している横顔は、ひどく疲れた顔に見えた。

ナースと一緒に現場の確認に向かう。廊下は最大の明るさで照らされていた。

予想はしていたが、やはりムラがあり、褒められた出来ばえではなかった。望月がいたら、きっと怒鳴られる。だが、ナースは静かにうなずいていた。どうやら、ムラは気になっていないようだ。

だが、二人の視線はある一箇所で同時に止まった。先ほどの老人の部屋のまん前だった。いつの間につけたのか、そこにはくっきりと手の平の跡が残っていた。

「あっ！」

徳永は思わず、声を出した。

「すぐ、直します」

徳永は道具を取りに引き返そうとしたが、いいです、という言葉に立ち止まった。

「さすがに、これ以上時間オーバーできないんで。私から上司には言っておきますから」

「作業完了ということで、いいんですか？」

「ええ。大丈夫です。ご苦労さまでした」

徳永は納得のいかない気持ちを抱きながらも、胸をなでおろした。

「それでは、失礼します」

確認が済み、徳永がナースステーションから立ち去ろうとすると、あの、と呼び止められた。

「はい」

「実は、さっき、あなたに言われてハッとしたんです。わたし、イラつき過ぎだなんて。最近、ちよっといろいろあって、自分を見失っていました。疲れたからなんて、言い訳にしかありませんよね……。ありがとうございました」

ナースは照れくさそうに笑った。初めて見せる笑顔は素敵だった。

車に戻った徳永は、すぐに望月に作業完了の電話をかけた。

「なんだよ、遅かったじゃねえか。何かあったのか？」

「いえ、何もないです」

「早く来いよ。おめーがいねえと、なかなか作業が進まねえ」

「了解です」

徳永は電話を切ると、煙草に火を点けた。

ふと、ムラのある仕上がりと、手の平の跡が頭をよぎる。時間がなかったからなんて、言い訳にしかならない。

「あの廊下、もっとキレイに仕上げたかったな」  
徳永はそう独りごちると、アクセルを踏んだ。

おわり